

代」には向けられていない。一方、西洋中世に関心を持つものの視野は、同時代のビザンツや東西イスラムにたいして十分開かれたものではない。このシンポジウムをひとつの端緒として、われわれの共同研究の場に、よりバランスのとれた視座が打ち立てられねばならないと、自省を込めて思う。

さて今回の提題において、野町、清水両氏とも、さしあたり西ヨーロッパにおける自由学芸の伝統について、少なくともローマ帝国の政治制度上の終焉と重なるような終端を見いだすことはできないし、また、それが暗黒の数世紀を隔てて、9世紀において突如復活せしめられたというような見方もできないことを示されたと思う。ただ、清水氏がその上で、この時代の知的文化に対して「局地的断絶」および「長期低落傾向」という診断を下そうとするならば、自由学芸の状況に対する所見だけをもってするのは、不十分なのではないか、というのも、この時代の学問的関心の中心は、何よりも聖書や教父の教えにあったと考えられるからである。この点について、私自身に識見も定見もあるわけではないが、今後の課題とするとともに、学兄諸氏のお考えを仰ぎたいと考えている。

意見

水落 健治

古代末期からカロリング・ルネッサンスに至る時代において、古典写本の収集・整理が行われ、それらの保存のために図書館（ヴィヴァリウム修道院など）が建設されたことは広く知られている。だがわれわれは、この一連の運動を介して、古代の知的遺産が十全な形で後世に伝承されて行ったか否かについては、若干の疑念を抱かざるを得ない。当時成立した写本の多くがアウグスティヌス等の教父の著作に偏っていること、自由学芸で培われた異教古代の知的遺産が、この時代になると、カシオドロスやイシドルスなどの百科全書的著作において平板な形で扱われることになったことなどの事実、この時代が、古代の知的遺産を後世に伝承するに際しての断絶の時代であったことを示しているようにも思われる。

けれども、われわれは、「カロリング・ルネッサンスにおける文化の断絶」を論じるに際して、書物（=写本）なるものが、現在とは異なった仕方で用いられていたこ

とを知らなければならない。

そもそも、写本は印刷術のない時代にあつては極めて貴重・高価なものであつた(筆者は在独当時、バンベルク派中世写本芸術の展覧会で、一軒の家を売り払い、その売却代金と交換に一冊の写本を購入した人の逸話を描いた素描画を見たことがある)。写本を個人で所有することは稀であり、一冊の写本の背後には多くの人々の活動が想定されるのである。

紀元5世紀アテナイの新プラトン派の講義においては、教師は、プラトンの『パイドン』やアリストテレスの『靈魂論』などを読みながら口頭で解説を加えていった。聴講者は語られたことをノート(scholia)として書き取り、自らの思想が成熟して行くと、その講義ノートを補充する形で、閲覧可能な註解書(ἰπομνήματα)として世に出して行つた(マリノス『プロクロス伝』c. 12)。アプロディシアスのアレクサンドロスに始まり、アテナイやアレクサンドリアの新プラトン派の人々によって書き継がれて行つた膨大なアリストテレス註解書群の多くは、このような経緯を経て成立したものと考えられる。

この事情は、ラテン語の世界でも同様であつた。紀元4～6世紀に活躍したラテン文法家たちの著作は、現在『ラテン文法家著作集』(*Grammatici Latini*)に収録されているが、これら著作を読むと、簡潔単純なドナトゥス(4c.)の著作が、カリシウス(4c.中頃)やドシテウス(4c.末)らを経て次第に補充・拡張されてゆき、遂にはプリスキアヌス(6c.)の精緻な体系に至つたその過程を見ることが出来る。書物(=写本)は、ラテン文法学校の講義においてもまた、ギリシア語の世界と同様の仕方で用いられていたのである。

したがってわれわれは、これらの時代からさほど隔たつてはいないカロリング・ルネッサンスの時代を論じるにあつても、現存著作の性格のみから、当時の文化の水準や質を論じてはならないだろう。写本のなかに自由学芸に関わる著作が少ないという事実や百科全書的著作の存在の事実から、自由学芸の水準が低下してしまつたと早急に結論してはならないのである。

清水氏が提題で言及された Hrotsvitha de Gandersheim の戯曲に現れる文法学にかかわる議論も、見方を変えれば、当時の人々の文法学にかかわる事項の精緻な議論の存在を示すものではあるまいか。